



ニュースレター

SDM NEWS



PMI日本フォーラムに慶應SDMが協賛・GAC来日メンバーと参加大学の教授たち

8

2014年 月号

行事予定

2014年9月2日(火)

「慶應SDM公開講座 ソーシャルデザインと地域イノベーション」

@日吉キャンパス

<http://www.sdm.keio.ac.jp/2014/09/02-091143.html>

要事前登録

2014年9月5日(金)

第1回「こと」ものづくりシンポジウム
「日本企業のイノベーション創出の課題と対策」

@日吉キャンパス

<http://www.sdm.keio.ac.jp/2014/09/05-131431.html>

要事前登録

2014年9月12日(金)

マネジメントデザインセンター公開講座
「ビジネスマネジメントの潮流」

@日吉キャンパス

<http://www.sdm.keio.ac.jp/2014/09/12-115532.html>

要事前登録

2014年9月30日(火)

第2回 農業・農村・地域活性化セミナー
[双方向で活性化する地域ブランディングの効果的な進め方]

@日吉キャンパス

<http://www.sdm.keio.ac.jp/2014/09/30-111710.html>

要事前登録

慶應義塾大学イベントカレンダーもご利用ください。

http://www.keio.ac.jp/ia/event/201408/201408_index.html

通算69号 2014年8月発行

SDM
System Design and Management

<http://www.sdm.keio.ac.jp/>

専任教員からのメッセージ

SDMは新たな自分を再発見する舞台である



慶應義塾大学大学院SDM研究科でインテリジェンス・システム論を担当している手嶋龍一です。私はNHKで特派員をながく務めていた経験から、「ミッドターム・キャリア」の重要性を痛感してきました。日本のジャーナリストは、現場で厳しい競争にさらされながら働いているうち、やせ細ってしまいがちです。知的補給を怠っているからです。まさしく「メディアの焼畑農業」です。ワシントン支局長を務めていた時には、アメリカ人スタッフの多くが働きながら大学院に通って研鑽を積んでいました。

組織は活きのいい中堅を使い詰めにし、くたびれてくると現場から引き揚げて元気な若者に入れ替えます。会社はそれでいいのですが、中堅の側はたまったものではありません。人生は一度きりのおかげがえのないものです。時には立ちどまって、知的な養分を蓄え、新たな方向に歩みだすことも必要です。海外ではごく普通のことなのですが、いまのニッポンでは、人生の途上で知的な小休止をとることはいまだに稀です。

慶應義塾のSDM研究科は、人生のチャレンジを支える新しい大学院です。日本社会のシステムを変革してみたい。地域社会のありようを変えてみたい。自分の可能性に賭けて起業してみたい。そんな志を仲間と共にする学生に溢れています。そしてSDMで研究をやり遂げ、実社会に再び戻って実践している仲間がいます。

私のゼミでは、現役の学生に劣らず、卒業生が毎月の研究会に顔を見せ、自分の問題意識を後輩たちと分かちあっています。研究会は入学希望者にも自由に開かれています。機会を見つけて参加してみてください。

SDM研究科教授 手嶋 龍一

最近のニュース

TOPIC

1

PLM14でのBest Paper Award受賞



プログラム委員長からの受賞の様子

慶應SDM博士課程学生の村岡祥雄君(指導教員:西村秀和教授)が2014年7月7日(月)～9日(水)に横浜にて開催された国際会議PLM14にて発表した下記論文がBest Paper Awardを受賞した。

題目:Thermal Management of Software Changes in Product Lifecycle of Consumer Electronics

著者:Yoshio Muraoka, Kenichi Seki, and Hidekazu Nishimura

モデルベースシステムズエンジニアリングに基づきソフトウェアの変化を考慮した協調設計モデルを構築し、PLM (Product Lifecycle Management) を取り入れた熱設計に関する新しい展開手法を提案できたことが高く評価された。



指導教員の西村教授と喜びを分かち合う

TOPIC 2 2014年7月12日(土)・13日(日)、PMI日本フォーラムに慶應SDMが協賛



満席のアカデミックトラック



ワークショップで講演する当麻准教授

PMI (Project Management Institute) 日本支部のアカデミックスポンサーになっている慶應SDMでは、2014年7月12日(土)、13日(日)の二日間、東京で開催されたPMI日本支部最大のイベント「PMI日本フォーラム」に協賛して参加した。フォーラムの中で行われた「GACワークショップ」(大学関係者限定)、および「アカデミックトラック」に、慶應SDMから当麻哲哉准教授(PMI日本支部理事)が出席、ワークショップではSDMにおける人材育成についての講演を行った。

GACとは、PMI本部(米国)がプロジェクトマネジメントの高等教育を実施している教育機関に対して、教育の質を保証する認定機関で

ある。世界で45機関が認定されている(2013年末現在)が、日本の大学ではまだ認定を受けているところはひとつもない。今回は、PMI-GACから3名が来日、日本のプロジェクトマネジメント教育の現状を理解するとともに、認定の可能性について議論する機会となった。慶應SDMは将来の認定校候補の一つとして挙げられている。

アカデミックトラックでは、通常の研究発表のほかに、大学で行なっている人材育成と産業界が求めている人材について、産学の意見交換となるパネルディスカッションが行われるなど、有意義なフォーラムとなった。

TOPIC 3 慶應SDM・小布施ソーシャルデザインセンター を開設

2014年7月10日(木)に、小布施町役場に「慶應SDM・小布施ソーシャルデザインセンター」(正式名称SDM研究所ソーシャルデザインセンター小布施オフィス)の開設記念フォーラムを

開催した。小布施町内外から100名以上の方が集まり、センターの概要説明やパネルディスカッションが行われた。今後は、様々な人々との協創のもと、小布施若者会議・小布施サマー

スクール・地域の未来作り会議の運営や、農都共生ラボ・地域活性ラボの視察旅行、新規ビジネス・幸せな地域づくり等の実践的研究・活動を行っていく予定である。乞うご期待。

コラム 一般社団法人可視光通信協会が2014年5月より活動を開始

2003年11月に慶應を中心にして任意団体である可視光通信コンソーシアム立ち上げ、10年余り可視光通信の普及、啓蒙、企画、標準化活動を行ってまいりましたが、可視光LEDが照明、交通信号機、車のランプ等に広く使われている現在、可視光通信技術を用いたビジネスの実現が強く求められるようになりました。そこで、可視光通信の基盤やプラットフォームを提供し、可視光通信を社会インフラとして広く普及させることを目的として、任意団体である可視光通信コンソーシアムを発展解消して、2014年5月に一般社団法人可視光通信協会(Visible Light Communications Association, VLCA)を設立し、慶應SDMの春山教授を会長として活動を開始しました。新たに設立された一般社団法人可視光通信協会の活動内容は、

- 可視光IDの基盤構築
 - 可視光通信規格策定事業
 - 可視光通信規格試験事業
 - 可視光通信イベント企画
 - 可視光通信システムの市場拡大に向けた普及啓蒙活動
- などです。ご興味のある企業は、一般社団法人可視光通信協会 (Email: info@vlca.jp 電話:050-6867-3384) までお問い合わせください。

ラボ・センター紹介

地域資源利活用ラボ (Local Resource Utilization Laboratory)

担当教員: 当麻哲哉准教授、吉田篤生特別招聘教授、手嶋龍一教授

概要

ラボ共同代表の吉田篤生
特別招聘教授

日本は、南北に3,500kmの海岸線に囲まれ、380,000㎡の国土の68%が森林である海洋森林資源大国です。とくに平野部外縁部から山間部にかけての中山間地域は、古来から農業産出ばかりでなく、木材や木炭など豊かなエネルギー供給源となつて、自然との密接な関わりを持つ文化に築きあげてきました。

「地域資源利活用ラボ」は、この中山間地域を含む自然環境に恵まれた農山漁村地域を、21世

紀の新たな生活様式を可能とする国土のフロンティアとして位置付け、隣接する中小都市との連携を進めて、地域企業と一体となって誇りの持てる自立的な圏域とすることを研究テーマとしています。

合同代表の吉田篤生・特別招聘教授(吉田篤生会計事務所 所長・税理士)は、経済産業省より「経営革新等支援機関」の認定を受け、中小企業の経営課題解決への支援を行なうとともに、新しい金融のあり方として金融庁・日銀が推進しているABL(動産・売掛金担保融資制度)を推進するための「動産評価アドバイザー」資格認定委員として、金融機関と協力し中小企業支援を行っています。

地域自立経済圏構築事業



地域資源利活用ラボのゼミ風景(吉田篤生会計事務所内にて)

我が国の企業の内99.7%は中小企業で占められており、経営課題が多様化、複雑化する中で、人的・物的資源の少なさから多くの経営課題の解決ができない状況にあります。特に地方に於いては、経営課題の把握、解決への相談相手や支援組織が出来ていないのが現状です。

全国各地域の特徴を歴史的側面から捉え、もともとその地域が持っている優れた資源(農林漁業、伝統的技術、自然環境に育まれた人間性等)を見直し、地域の特性を生かした産業の構築を行なうために、各地域の市役所・商工会・法人会・地元商店街・地域金融機関・大学等と連携して、現状認識と経営課題の把握から対策の立案を推進していきます。

フィールドワーク

飯能市役所の市長室政策実現課と連携して、シティプロモーション推進事業に協力しています。豊富な森林資源を活用した新たな木質バイオマスの上流(伐採・収束・運搬)から、中流(集積・エネルギー変換)、下流(ビジネス創生・エネルギー利用)にかけての技術の推進や、飯能固有の地

域資源を有効に活用した六次産業化への取組みを支援していきます。また、中小企業者と農林業者と連携した新事業の開発や、新製品、新サービスの事業化を、経済産業局、中小企業庁との橋渡しを含めて活動していきます。



書籍紹介

『システムズモデリング言語SysML』

「モデルベースシステムズエンジニアリング(Model Based Systems Engineering、以下MBSE)」は「システムズエンジニアリング(Systems Engineering)」である。

これは、A Practical Guide to SysML(The MK/OMG Press)の著者であるSanford Friedenthal氏がINCOSE(International Council on Systems Engineering)やOMG(Object Management Group)などのミーティングで必ず口にする言葉である。MBSEの基本は、製品やサービスなどの開発を進めるためのシステムズエンジニアリングである。しかし、これまでのシステムズエンジニアリングでは「文書」をもとにしてきたが、MBSEでは「モデル」にもとづくのである。これにより、ドメインをまたぐコミュニケーションの活性化、モデルの再利用による生産

性の向上、要求のトレーサビリティの確保が期待できる。近年では、MBSEの重要性、必要性が航空・宇宙分野のみならず、自動車、医療分野などの産業界に広がりつつある。

特に、システムモデルの記述方法として、システムズモデリング言語SysML(Systems Modeling Language)が注目されている。SysMLを用いたモデルにより、システムの振る舞い、構造、要求、パラメトリック制約を表すことができ、システムズエンジニアリングプロセスの中で、さまざまなビューでシステムを表すことができる。慶應SDMでは、2008年の開設以来、このSysMLを用いたMBSEに関する講義(担当: Laurent Balmelli氏(元IBM)、西村秀和教授)を行っている。ご紹介の書籍は、2008年秋学期にこの講義をはじめるところに出版されたA



システムズモデリング言語 SysML
西村秀和(監訳)、訳者:白坂成功、成川輝真、長谷川堯一、中島裕生、翁志强
著者: Sanford Friedenthal, Alan Moore, Rick Steiner
出版社: 東京電機大学出版局
2012年5月10日

Practical Guide to SysML(The MK/OMG Press)の翻訳書である。システムズエンジニアリングとともにMBSEへの理解を深めたいとお考えの方、メカ、エレキ、ソフトなど複数のドメインにまたぐシステムの開発に取り組む研究者や技術者の方々、MBSEの導入を検討中の経営層の方々にこの書籍をご一読されることをお勧めしたい。



慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科附属 SDM 研究所

〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学 協生館
Tel: 045-564-2518 Fax: 045-562-3502 E-mail: sdm@info.keio.ac.jp